

〈最終講義〉

ペスタロッチ，教育史，それに雑言少々

山 内 芳 文

ペスタロッチ、教育史、それに雑言少々

山内芳文

はじめに

無事に過ごしていれば、今日の日の来ることは、20年まえに本学に参りましたときに、すでにはっきりとしていたことでした。とはいっても、20年もまえから、この時に備えるなどということは、いくら何でも早すぎましたし、また最初の3分の1はドイツでの在外研究や学位論文のとりまとめに、つぎの3分の1は教育学研究科長の日常に安らぐ日などあらうはずはなく、結局のところあとの3分の1の今から6年ほどまえから、時期的に申しますと、図らずも附属図書館長の任に就いたとき、たとえ機会が与えられなくとも、何を言い遺すかをほぼ決め、図書館情報大学との統合などの多忙な業務の合間に、むしろその地の利を活かして、そのための資料をばちばちと集め始めていました。幸いなことに、筑波大学附属図書館の教育学や教育史のコレクションは、前身校時代からの先輩諸教授のご努力で今日もなお世界に誇れるものとなっていますので、その蓄積のおかげで、いわゆる外部資金の申請など、いたずらに税金のお世話になることもほとんどなく、充実した調べものができました。しかしながら、そのあとは、ほとんど日を措かずに大学評価の法定業務にかかわることになり、その合間を縫ってほそほそとそのとりまとめに努めてきましたが、とうとう今日までできてしまったというのが悲しい実情なのです。

ところで、今日の私のお話は、本日のペスタロッチの集いにちなんで、「清貧論の系譜からみたペスタロッチ」、つぎにそのペスタロッチをイヴェルドンに訪ねたこともある最初の本格的な教育史家カルル・フォン・ラウマーとその『教

育思想史』、ならびに明治中期の高等師範学校教授で草創期の教育学を担当した谷本富とその高等師範学校の教育史教科書『新体欧州教育史要』について、そして最後に「ぞつげん」少々と読むか、それとも「ぞうごん」少々と読むかは、お聞きになった皆さんの受け止められかたに委ねたいと思いますが、これからの教育学系への期待というか、お願いというか、そのようなことを少しばかり述べることをお許しいただきたいと思います。

清貧論の系譜からみたペスタロッチ

ペスタロッチについては、一般に、その思索と実践の生涯を前期と後期に分けて、その前期は孤児院の経営と自らの社会哲学の深化、またその後期は国民教育の実践的な展開と教授論の確立に特徴づけられる、と言われてきました。これはペスタロッチの年譜などをみればすぐにわかることなのですが、そのふたつの段階をどう連続的ないしは統一的に把握するのかという、いわば「ペスタロッチ問題」がそのような区分そのものの当否も含めていろいろと議論されてきました。しかしながら、前期をその精神において、そして後期をその方法において際だたせようとする傾向は、依然としてペスタロッチ研究者の関心に支配的であるように思われます。もとより私はペスタロッチ研究者などではありませんので、その支配的な研究の傾向や関心には囚われず、比較的自由に自分の観点を設定して、この「ペスタロッチ問題」に、いささか大胆に関わってみたいと思います。

「清貧」という言葉は、かつて、貧しく不器用な青年と天才的な少年の菊作りにかけた交友と葛藤を描いた太宰治の短編『清貧譚』を通して知る機会がありましたが、最近では先年亡くな

った中野孝次氏によって、帝政初期ローマの思想家で政治家、そして皇帝ネロの家庭教師で、しかもその命令によって自殺したセネカの「瘦せた哲学者」の生き方のなかにその原型が見いだされ、西行や良寛らの日本の隠者たちに重ね合わせられて広く紹介されています。しかしながら、清貧のイメージは、実は、古代から中世のキリスト教のなかにも脈々と受け継がれていたものなのです。とはいっても、ペスタロッチにイメージされるキリスト教の清貧思想は、ことに中世カトリックの荘厳で華麗な大伽藍のイメージからはほど遠く、決してそれに重なり合うものではありませんので、あるいはこの脈々とといった表現は誤解を招くかもしれません。中世の文化的な開始の道標とされる6世紀なかばのベネディクトのモンテ・カッシノの修道院こそがキリスト教の清貧思想の興りとされるようですが、その創設者ベネディクトがのちに聖者に列せられたことを考えると、ことはそう単純でもありません。ローマ帝国においてキリスト教が公認され、さらには国教となったのは明らかにそれより以前で、その時点でキリスト教は、すでに国教として世俗支配に正統性を与える顕教的な機能を獲得しています。これはローマ帝国が実質的に崩壊したあとでも世俗君主に対する教皇代理などへの任命の行為、さらには教会裁判や婚姻や葬祭などの庶民の日常への関わりを通して存続しますが、それに修道院を支配することでイエスと使徒たちの追体験という密教的な機能を併せ持つこととなりました。荘厳なヴァチカンとモンテ・カッシノの洞穴、華麗な金糸銀糸の法衣と粗末な檻褌の僧衣、この対照は教会と修道院という緊張をはらんだかたちで、中世のキリスト教を支えています。それは、さらに政治と学習との対照として、これを機能的に置き換えてみてもよいのかも知れません。

亡き下村寅太郎先生の名著もあり、いくつか行伝の類もでていきますので、アッシジのフランチェスコという名前をお聞きになった方もおありかと思いますが、12世紀の終わりに、中西部イタリアのアッシジという都市の比較的裕福な

商人の跡取り息子だったフランチェスコがすべてを捨てて町はずれに庵を結び、着の身着のままで祈りの世界に入ります。托鉢によって糊口をつなぎ、ひたすらに祈りと説教に明け暮れるフランチェスコには、やがてそれに従う者も出てきますが、その様子はガリラヤの湖畔を彷徨うイエスと使徒たち一行の姿を髣髴とさせるものだったと言われています。小鳥に説教するフランチェスコの姿はやがてルネッサンスの画家ジョットによって描かれ、ひたすらに祈るその体には聖痕があらわれたなどと記す伝記もあります。その弟子となったクララによって女子修道院も開かれることになりますが、ペスタロッチの戯曲『リーナハルトとゲルトルート』の良妻賢母の主人公ゲルトルートの名は、ハッケボルンのゲルトルートなど、すでに有名な修道女に受け継がれてきていたことにもとりあえず留意しておくべきでしょう。

教義の厳格な解釈で異端審問に辣腕を振るい、やがてパリなどの中世の大学の神学部を席卷することになるドミニコ会を除いて、修道院はベネディクトやその分流シトー会のベルナルドゥス、そしてやがて聖者となったフランチェスコなどの開祖たちの意志とはかけ離れて、まもなく巨大な財産を形成し、要塞とも見まごうばかりの威圧的な建造物を構えるようになります。しかし、いずれにしてもそのなかではベネディクトの「祈り、働き」、ora et labora と言いますが、その短く的確な表現に象徴される清貧の戒律は長く維持されていました。今日でも、南ドイツからスイスの北部を経てオーストリーのアルプスの北側には、菩提樹の黄緑とカルストの白のコントラストを背景に実際の修道院やその廃墟が多くみられます。ことに、その西の端に位置するヴェルテンベルクの南部では、宗教改革を受け入れています、それでも神学校などを付設するなどして修道院を残存させています。宗教改革は原始キリスト教、つまりイエスと使徒の事績への原理主義的な回帰ですので、プロテスタントにはカトリックのような密教と顕教の使い分けなどはほんらい期待できず、したがってそれは「清貧の思想」をそのまま受け

継がなくてはならないはずのものでした。初期のルターにおいては、福音の教えに従った夫婦と親子の親密圏こそが社会のすべての基礎となっていました。世俗国家と結びついたルターは、やがて二世界統治という便法を編み出し、俗の世界における支配の正統性を聖の世界から類推的に援用することによって、領邦教会の構築に理論を提供することになります。したがって、ルター以降のプロテスタンティズムは、カルヴァンの系譜を除いて、つねに原理主義への回帰を強迫観念として内蔵させることになりました。その動きはいろいろな場面で現れることとなりますが、敬虔主義、ピエティズムの出現もそのひとつと考えてよいと思います。

「まえおき」がだいぶ長くなりました。ペスタロッチが育った精神的な風土はドイツ語圏のスイスで、今日でも、そこには敬虔主義の影響が色濃く投影されております。スイスの敬虔主義はもともと北で境界を接するヴュルテンベルクに由来するものと考えられますが、領邦教会を担うことで体制内化されていったヴュルテンベルクの場合、これについては最近の三輪貴美枝君の学位論文が克明で的確にフォローしていますが、そのようなヴュルテンベルクの場合とは異なって、スイスの場合は社会の基本的な単位でもある隣人共同体の伝統が敬虔主義の原点を受け入れた変種とでもいってよいものです。直接に神と向き合うことのできる自然の環境、そしてそのすべてを神が知ろしめす天（あめ）の下で、福音に従って清貧のうちに親子が肩を寄せ合って暮らす家族こそが、この場合の理想の姿とされていました。こうして、ペスタロッチにとっても、『隠者の夕暮』という表題そのものが「清貧」のイメージに重なり合うように、「山上の垂訓」は特別な意味をもつことになるのです。「貧しき者こそ幸いである」。イエスのこの言葉は、「マタイによる福音書」によることが一般的なのですが、そこでは「こころの貧しい人たちはさいわいである」となっています。しかしながら、「ルカによる福音書」では「あなたがた貧しき人たちはさいわいだ。神の国はあなたがたのものである」となっており、すでに古典

となっているアルバート・シュバイツァー博士の名著『山上の垂訓』や今日のマタイ福音書の研究でも、これはマタイによる付け加えで、福音の解釈の歴史においても、本来の意味における貧窮、困窮、あるいは飢餓を意味しており、マタイの本意においても飢餓と心とは並列以上にはなりえないとされてきているようです。ギリシア語のオリジナルでも「心において貧しい」とされていますが、とりあえず貧困を克服したはずのギリシア市民の建て前が明らかにそのような訳語を要求していたのでしょう。しかしながら、端的に言って、物質的に豊かでも心の貧しい者はそのままでは救われようがないというのが道理というものです。福音書にあらわれるイエスの言葉は、私のようなキリスト者でない者にとっても、きわめて明快であって、その解釈に面倒な逆説やメタファーのフィルターをかける必要はまったくありません。つまり、その「貧しき」こそが清貧の原型であって、これをペスタロッチの教育思想の基本的な部分として、そのエートスのなかにおいて見直してみることができるのではないかというわけです。

『隠者の夕暮』の「身近な関係において真理感覚が鍛えられる」という教育の基本的な原理は、「生活が陶冶する」と置き換えてもよいのかも知れませんが、聖家族を連想させる家族の親愛のもとから清貧の教育の原風景がそこにはあります。まさに、一切を捨てた身近な関係においてのみ人々は神を知る、つまり真理が感覚されるということで、これこそが「直観」の本来の含意ということになるでしょう。ペスタロッチが用いたドイツ語での清貧は Arme で、これは男女同型、しかも「腕」の含意は明らかに「腕をとって、ともに苦勞する」ことを指示しています。あえて禁欲を求める必要さえない清貧の共同体、その原風景の中心には神とのアナロジーで家の父、つまり家父の姿がありますが、これは敬虔主義の聖家族のイメージではもはや通例となっていて、母と子はその庇護のもとにあるのです。「黙してひと切れのパンを与える父」の姿こそが、『隠者の夕暮』における教育の本来的で直接的な内部の関係をつくりだしているのです。

しかしながら、『隠者の夕暮』に続いて著された戯曲『リーンハルトとゲルトルート』にある家父リーンハルトの墮落は、家族の解体という危機に直面して、家の母、つまり家母の教育を表面に押し出すことになるのです。「はじめに言葉ありき」、ヨハネの福音書の冒頭は、つづいて「言葉は神である」とも記しています。ペスタロッチにおける教育のはじまりは、こうして自然のなかから言葉によって神の意志を読み取る必要性によって動機が与えられるのです。まさに、自然を通した神と人間のコミュニケーション、言霊（ことだま）というべきなのでしょう。このことは、自然のなかからスピリットを取り出す神聖な職業にあった石工のリーンハルトに代わって、すでにゲルトルートという名が中世の修道女に由来するということを申しましたが、神が彼女にまさに「幸いなる貧しき者」、そして言霊の媒介者を見いだしたというべきでしょう。産業社会の荒波によって家族の親密圏を奪われた子どもたち、あるいは相つぐ戦乱や内乱で孤児となった子どもの教育は、母と子の閉じられた関係からその本来の姿をその外に引き出し、言葉を媒介とする教育の方法原理を母性の原理から演繹することで可能になったというべきでしょう。『シュタンツ便り』は、ご承知のように、内乱によって家族を失った孤児たち、さらには親の関心の外に置かれた子どもたちが対象でしたが、その教育は、まず彼らの直観を頼りに、つまり現実の境遇、これが大切なのですが、これと結びついた経験として子どもたちに意識されること、それが知識を獲得し道徳を身につけることの前提となるというものでした。ペスタロッチは、そこでは、「学校教育は家庭教育を手本にしなければならない」と言っています。

こうして一般化される学校教育の論理は、この『シュタンツ便り』、そして彼の教授論が集約的に披瀝されている『ゲルトルートは彼女の子をどう教えるか』における言語教授の実際にみられるように、いわば教授の機械化のみちを一気に突き進むことになります。このようなペスタロッチの教授論からは、敬虔で清貧の家族のイメージは窺う由もありません。ペスタロッチ

にとって、現に自分の目の前にいる貧者の群れこそが問題であって、敬虔で清貧の自給自足可能な家族はもはや憧憬の対象でしかありませんでした。しかしながら、ペスタロッチがその貧者の総体に清貧と敬虔の実体をみていたことを忘れてはなりません。彼らにこそ、彼らの深部にこそ、神が祝福されるはずの純なる心があると、ペスタロッチは信じていました。むしろ、その確信こそがペスタロッチの教授理論を支えていたとみておくべきでしょう。だからこそ、彼は、貧者の教育のために自ら貧者になると宣言したのです。その姿に、私はかのアッシジの聖者の「清貧」の決意を重ねて、ペスタロッチの新たなイメージを描いてみたかったのです。

これ以降はまったくの蛇足です。私たちは、ペスタロッチの清貧と教育の問題に関わる一方で、『エミール』第1篇のなかでルソーが述べている「貧しい者に教育の必要はない」(Le pauvre n'a pas besoin d'éducation)という一節も気になるのです。常識的に言えば、ルソーの言っていることはこうなります。貧しい者には自然の過酷な環境がどんな境遇でも生き抜く力を身につけさせる。しかしながら、裕福な者にはそうはいかないので、貧しい者を必然的に鍛えるような自然の環境を人為的に用意しなくてはならない。「農夫のように働き、哲学者のように思考する」と言うルソーには、ローマの思想家セネカの禁欲と清貧の思想が色濃く感ぜられるのです。しかしながら、貧しき者の生活において教育の原型を見いだすルソーのこの言説のなかに、ペスタロッチの敬虔と清貧の教育理想との重なり合いを求めるよりも、現実認識において大きなズレが生じていることのほうが重要です。ペスタロッチもルソーも、いずれにしても物質的には貧しくとも精神的には豊かな人々の家族に神の祝福があり、あるいは自然の恵福があると信じていたといってもよいと思います。そして、ルソーも「分別ある平凡な父親に勝る教師はいない」と述べています。ペスタロッチにおいては貧しき者、ルソーにおいては富める者が教育関心の対象となったことについて、物質的には裕福だが精神的には貧しい私たちの時

代は、このコントラストをどのようにうけとめたらよいのでしょうか。ひとは、ここで、ヘルバルトの教育学を想起するかも知れません。先に触れたマタイ福音書のギリシア語オリジナルの場合と重ね合わせてみると、『一般教育学』のヘルバルトのギリシア・モデルにおいては、物質的には裕福だが精神的には貧しい者の教育への関心を、ペスタロッチからルソーやロックへの照準の転換から見いだすことも可能なのです。しかしながら、このことについては、主題をさらにおおきく逸脱する可能性もありますので、ヘルバルトの教育学には現代教育の基本的な問題がすでに思想的に介在していることを示唆するに留めて、これ以上の言及はしません。

私は、相当に長い時間をかけて西洋の教育思想の古典に馴染んできましたが、最近では古代ギリシアやローマ、さらにはルネッサンスの思想に深い関心をもっています。電車に長く乗る機会が多くなって、買っとく、積んどくだった文庫本を時間つぶしに読むのを日常にしているからかも知れません。現代の教育への思想研究の関わりというのは、ただ「通訳」するだけの浅薄なものでは何も解らず、もてる教養を総動員して「翻訳」することによってはじめて可能だというのが、そのような日常から得た最近の実感なのですが、この年齢になっては、まさに「日暮れて道遠し」です。この点で、渡辺一夫先生のラブレールや梅根悟先生のペスタロッチはまさに「翻訳」の金字塔、両博士ともルネッサンスのヒューマニズムに深い造詣をもていましたが、ヒューマニストとしてのそのしごと自体がまさに日本の思想といってよいものでした。和魂洋才、そして古くは和魂漢才などと言われていましたが、明治以来の、いやそれ以前の日本の外国研究もそのようなスタンスで行われてきました。しかしながら、最近の外国教育研究の動向のなかに、論文取りまとめの要領のよさには舌を巻くのですが、そこについつい散漫で身勝手な「通訳」だけの浅薄な傾向がみえてしまうのは、果たして私だけの僻(ひが)目なのでしょうか。

ラウマーとその『教育思想史』について

ドイツ東北部デッサウの近郊ヴェルリッツの土地貴族でデッサウの宮廷顧問官を父にもち、ベルリンやゲッティンゲンで法律を学んできたカルル・フォン・ラウマーが心機一転して鉱物学の研究を志し、フライブルクを経てナポレオン支配下のパリに滞在していたとき、つまり1807年から1808年にかけてのことなのですが、ここで活字となったばかりのフィヒテの講演集『ドイツ国民に告ぐ』を読み、そのなかでのペスタロッチに強い関心を抱きました。ラウマー、24才のときのことです。ペスタロッチのもとで教師になろうと、婚約者リークヒェン・ライヒャルトの8才になる弟のフリッツをともなって1809年の11月イヴェルドンに彼を訪ねたときのことは、ラウマー自身、死の翌年、つまり1866年に刊行された『自伝』で、こう書き残しています。「われわれが赤い色の家に投宿したのは、冷たい雨の降る夕方だった。翌日にわれわれは、かつてカルル豪胆王が創建した古城のなかに入った。その城内は4本の丸筒のような塔によって囲まれていた。そこには、たくさんの少年たちがいた。ペスタロッチのところに案内されたが、彼はおよそだらしない服装で、古びた灰色の上着、ヴェストはなく、短いズボンで、靴まで垂れ下がった靴下をはいていた。硬く黒い髪はもじゃもじゃで、およそ櫛など通したこともなく、きたならしかった。額に深い皺を寄せ、暗褐色の目はある時には穏やかで優しく、またあるときには火を噴き出すようでもあった」。

ラウマーによりますと、当時のイヴェルドンには、城内に6才から17才までの生徒が137名、市内にも28名の生徒がいて、彼らは昼になると城内に食事にやってくるというのでした。合計165名のうち、スイスの生徒は78名、ほかにドイツ、フランス、ロシア、イタリア、スペイン、そして北アメリカから生徒がやってきていました。城内には15名の教師がいて、そのうち9名がスイス人でした。ほかにペスタロッチの方法(メトード)を学ぶ32名の大人がいました。結論からいえば、この半年のイヴェルドン滞在は、ラウマーにとっては、「幻滅、あるいは失望」で

した。enttäuscht というのは、むしろ「欺かれた」といったほうが語意に近いかもしれません。ラウマーは、こう言っています。「働こうと思っても、あまりにも多くの少年たちの喧噪の真っ只中の立ち机ひとつという状況だった。どの教師も居室などなかった。それでも、私はフリッツを連れて、この施設に預けた。私の境遇のひどさは、これまでの施設についての報告と現に私が見たり経験したりしたこととを対照させるのに十分だった。そのような報告によって、ことにその確立しつつあった「方法」、すなわちメトデの習得への期待が高まっていればいるほど、そのような機械的で画一的な教授法の展開にしだいに失望させられるのだった」と。そして、ラウマーは、イヴェルドンでのそのような苦悩については、教師たちのあいだでの深刻な確執を背景に、ペスタロッチ自身も後年『わが宿命』で告白していることだ、とも言っています。また、この事情については、ハインリヒ・モルフの有名な『ペスタロッチ伝』によると、ラウマーの失望の原因は、許嫁の弟フリッツにあったとも言われています。裕福な家庭で母親の膝しか知らず、ひとに奉仕されても、ひとに奉仕することなど思いもよらない少年フリッツには、その集団に馴染むのには年齢的にもう遅すぎた、というわけです。ラウマーにとっても、『隠者の夕暮』の親と子の親密な世界など、ここでは想像さえもできない状態だったようです。この時期のペスタロッチは、『隠者の夕暮』はもちろん、さらには先ほどのラウマーの回顧のなかにあった「報告」のひとつでもある『シュタンツ便り』の世界からもシフトしていて、まさに集団の教育、すなわち学校教育こそが、教授の一般的な理論を提供する唯一の基盤となっていました。こうして、『教育思想史』には、『隠者の夕暮』の原文、と言ってもイヴェルドン時代に知り合ったペスタロッチの助教のひとりニーデラーによって改変されたもの、後にニーデラー版とよばれることになるテキストが転載されています。この事実については、梅根悟先生の『隠者の夕暮』の翻訳の詳細な注のひとつにおいても、『隠者の夕暮』の文献考証の一部とし

て触れられています。『隠者の夕暮』は、覚醒主義運動の神秘主義に傾倒していたラウマーにとって、実際の実践の猥雑さへの失望とは対照的に、顧みれば自分のペスタロッチへの信頼の原点を示していたはずの、まさに神聖な一書だったからだと言ってよいからです。

バゼドウの汎愛学舎で有名なデッサウに幼少年期をおくったラウマーがフィヒテを通して汎愛主義とはまったく趣きを異にするペスタロッチに心酔したものの、その事業の猥雑さに失望してペスタロッチのもとを去って、シュレジェンの中心都市ブレスラウで鉱山技師と当地の大学の鉱物理学の教授として落ち着くまでには、1年ほどの期間がありました。ヨーロッパ各地の山脈の形成についての比較が彼の研究テーマでしたが、その時点から神秘的で夢想的な考え方が彼をとらえるようになります。やがて、ナポレオンからの解放戦争やブルシェンシャフトの国民運動にもかかわりをもちますが、ペスタロッチが没した1827年、バイエルン公国のエアランゲン大学に博物学と鉱物理学の教授として赴任します。大学に職を得るまえに一時関わりをもったニュルンベルクの貧民児童のための学校を発展させ、1849年には、ラウエス・ハウスの始祖であるヴィヒェルンのエアランゲン来訪を機に、エアランゲンの同僚とともに当地に貧民児童救済の学校を設立しています。このようなラウマーの幸運ともいってよい生涯には、かなり裕福な土地貴族の家系に属することによる資産と縁故の影響が確実に投影されていることを忘れてはなりません。そのようなラウマーの教育実践を貫く方向性は、明らかにルネサンス、そしてコメニウスからの覚醒主義そのものでして、自然主義者ルソーの確信的な拒絶と三月革命の寵児ディースターヴェークへのあからさまな敵対とによって定式化されていました。結果的に主著となった『教育思想史』は、その端緒において、その傾向を明確に示しています。現代の私たちは、啓蒙主義に明確に背を向けたこの「保守主義者」のなかに、多くのその方面の著作において示される神秘主義的な鉱物理学への関心においてフレーベルを連想し、また『隠者の夕

暮』から『シュタンツ便り』に自らのイメージを重ね合わせて、貧民児童の学校経営にかろうじてペスタロッツとのつながりをみてとることができるようにも思います。

ラウマーの名を唯一後代に留めている1842年の『教育思想史』がドイツにおいて始めて出現した本格的な教育史書であるにもかかわらず、現在においては一部の教育史研究者以外には、その名さえ知られていません。しかも、そのさいのラウマーは、『世界図会』の考案者としてのみ伝承されてきたコメニウスの『大教授学』の再発見者として、そしてすでに述べましたように、おそらく初めてペスタロッツの教育実践と教育思想を詳細に整理し、『隠者の夕暮』にペスタロッツ教育学の真髄をみたことによって、ラウマーの『教育思想史』は、明らかに、コメニウスからペスタロッツへの、しかもその神秘主義的なみちすじを叙述の基軸としているのです。

ところで、現生における学知の獲得が来生における人類の幸福をもたらすというコメニウスの教育思想の確信的な根幹は啓蒙主義の教育思想に重なってきます。この点で、コメニウスには、たしかに啓蒙主義者といえなくもない側面があるのですが、そのコメニウスを啓蒙主義の教育家たちは完全にといってよいほどに無視してきたのです。コメニウスの啓蒙主義的な傾向が注目されるのはかなり後になってからのこと、極端ないいかたをすれば、西欧の教育思想史家がその「近代」性に関心をもつようになる20世紀の後半になってからのことなのです。さらにその「神秘主義」的な傾向に主要な関心がむけられるようになるのは、ごく最近になってからのことで、その理由を詮索すること自体かなり困難ですが、ルネサンスの神秘主義的な進歩主義からのデカルトの合理主義による偏位において、啓蒙主義の成立が一方的に確認されるとすれば、そのような事情はある程度の推測を得ることになるかもしれません。そのような成立は、イギリス近代科学思想史の劈頭を飾るはずのフランシス・ベーコンからの系譜をカッコに括って、あえてロックにおいて確認されるのが通例です。

『教育思想史』の第一部で展開されている叙述の構成からは、ドイツ啓蒙主義の主流的な傾向、つまりベーコンやコメニウスなどに濃厚に漂う錬金術的な神秘主義を脱色させたロックやフランスの啓蒙主義者たちの延長線上にすぐれて教育的な地歩を確保してきたドイツ啓蒙主義の主流的な傾向に対抗している著者ラウマーの意図が明らかに見て取れるのです。Ⅰで「中世」の教育について導入的に触れたあと、それはルネサンスから本格的な叙述を開始します。「ダンテの生誕からペトラルカとボッカチオの死までのイタリア」という章題のもとに、この3人の教育思想を扱ったⅡがこれに続きます。Ⅲは「ペトラルカとボッカチオの死からレオ10世までのイタリアにおける古典的な人間形成論の発展」、Ⅳは「レオ10世とその時代～光と影～」、Ⅴでは「イタリア（ルネサンス）の結末とドイツへの移行」の題目で「1340年から1483年まで、つまりゲルハルドゥス・マグヌスからルターまでのドイツとオランダ」が扱われています。第二部までを見通すならば、このⅤこそが本来のⅠになるべきでした。Ⅴは、具体的には、その第1節で、ヒエロニムスからエラスムスに至る人文主義者の系列が取り上げられています。ルターに至るまでにはヴィンプフェリンクやロイヒリンといった私たちの教育史にとっても馴染みの人物が登場して、第2節は「宗教改革・イエズス会・リアリズム」として、ルター、メランヒトン、ヨハネス・シュトゥルム、そしてフランシス・ベーコンとモンテーニュ。そのあいだに、つまり、シュトゥルムとベーコンのあいだに、ザクセンとヴュルテンベルクの改革者たち、イエズス会、大学と学校の関係、ヴァーバル・リアリズムといった項目が挿入的に配置されているわけです。

ラウマーの『教育思想史』は、それ自体、カトリックのバイエルン公国をパトロンとするエアランゲン大学、エアランゲンはニュルンベルクの北にある大学町、大学は現在ではエアランゲン・ニュルンベルク大学となっていますが、そこでの講義が主体となっています。したがって、イエズス会への言及にはかなり宗派的な配

慮が働いていると考えられるとはしても、ルターをその構成の中心に据え、その軸をルネサンスからルターへと設定していることは、きわめて特徴的であるといつてよいと思います。初版の緒言の冒頭で、ラウマーは、「この書物は、1822年にハレで、その後の1838年から1842年までエアランゲンで教育思想史について講義したものをまとめた」と言つて、この講義の動機を、つぎのように語っています。「31年にも及ぶ教師生活で、単に私にとって教えるべき内容だけでなく、教える技法そのものについても次第に興味をもつようになってきた。そしてその興味が募れば募るほど、継続した講壇の講義ではなく、むしろ談論のかたちをとつて、それを教えるようになった」。そして、そのとりまとめがルネサンスをもって始められていることについては、「なによりも、ドイツに注目したからだ」であり、画家ラファエロのパトロンとしてルネサンスの絶頂にあり、同時にその栄華を維持するためにドイツでの贖宥状販売を認め、さらにルターへの対抗から神聖ローマ帝国のカール5世と政略的に結んだメディチ家出身のローマ教皇レオ10世に終わる序章に導入されて、ルネサンスからドイツへの教育理念の人格的な連続性は「ルターとメランヒトン」において示される、というのです。

ラウマーの『教育思想史』の終点は、その第二部の終章「ベーコンの死よりペスタロッチまで」のペスタロッチに関する叙述に置かれています。ラトケの28ページ、コメニウスの43ページに比して、ただふたりだけの非ドイツ人であるロックとルソーには、それぞれ10ページと49ページ、そして汎愛派にはまとめて40ページが当てられています。ペスタロッチには93ページといったおおきなスペースが割り当てられているのです。ロックや汎愛派の啓蒙主義への目配りは最小限に抑えられ、コメニウス、ルソー、それにことにペスタロッチへの強い思い入れが、目次の構成においても滲み出ています。ただし、ルソーは、この場合、明らかに、ロックとのつながりにおいて、コメニウスからペスタロッチへの系譜にとって否定的な媒介の位置にあると

いつてよいと思います。ラウマーの教育思想史は、こうして、コメニウスの『大教授学』からペスタロッチの『隠者の夕暮』へのみちがその主流的な系譜として構想されているのです。

なお、このラウマーについてのお話は、近く刊行予定の大学院教育学専攻の機関誌『教育学論集』第3号の「ドイツ教育史叙述断章」と題する文章3節のうちの1節をおおむね引き移していますが、今日の日を意識し、章句の入れ替えや省略を行うなど、記述をかなり大幅に変更しています。

谷本富とその『新体欧州教育史要』について

谷本富のことは、明治中期から高等師範学校の教授として教育学や教授法を講じていた、あるいはヘルバルトの信奉者で、その講義はヘルバルトの素述であったという具合に、よくご存じのことだろうと思います。そのようなことを詳述した研究もいくつかあります。そして、その評判があまり良いものでないこともお聞きになっていることと思います。学問をほったらかしにして講演で荒稼ぎしている自己顕示の亡者などといった悪口雑言が公然と浴びせられています。もっとも、教育学の世界では今日でもこのような「雑言」の対象となるはずの俗物が大手を振ってポピュリズムを満喫していますから、別に驚くほどのことではないのですが、ことはわれわれの前身校のこと、しかも高等師範学校で教育史を講じ、教育史の書物も著していた大先輩のこととなると放置しておくわけにもゆかず、さしあたりその人物と「教育史」だけでも、それがどのようなものだったのかについて調べてみたというわけです。

谷本の履歴書、これは今日の人事記録にあたるオフィシャルなものです。これが本学の人事課に保管されています。それによりますと、谷本は、慶応3年、1867年、讃岐高松の生まれで、高松医学校を卒業後、東京大学の選科生、つまり高等学校一明治27年以降は高等学校一を卒業していない、いわばノン・キャリアの課程の学生として哲学を学び、卒業後に、すでに帝国大学の分科となっていた文科大学で1年の

特約生として毎月15円の手当の給与を受けながら教育学を学び、明治23年7月に卒業、翌月から山口高等中学校に勤務、やがてその廃校とともに、明治27年2月9日に高等師範学校の「授業囑託、報酬金60円ヲ給与」となっています。この人事は、その前年に肺結核を発症し、すでに病床に伏していた高等師範学校教授兼帝国大学文科大学教授日高眞實のピンチヒッターとしての発令でした。かつてベルリンで、哲学者として、しかも教育学や教育史でも令名の高かったパウルゼンの講義を聴いたこともある新進の教育学者日高の担当は、本学附属図書館の前身校資料室に保管されている『高等師範学校要覧』によりますと、明治25年度は教育学、教育史そしてドイツ語となっています。日高の蔵書は「日高文庫」として筑波大学附属図書館が所蔵していますが、残念ながら日高が講義したと思われる教育史の内容はわかりません。しかしながら、当時の高等師範学校における教育学の講義時間は第1学年から第4学年まで毎週各2時間で、週あたり延べ8時間もあったことから、そのいずれかの段階で日高によってパウルゼンの教育史が講じられていたと思われます。そして明治26年度、日高最後の担当は教育学と哲学となっています。谷本の実際の担当が発令されるのが明治27年4月7日、「教育学及哲学ノ教授ヲ囑託シ、壹ケ年金800円ヲ給与」されることになります。谷本は、その後の明治27年5月28日に非職となった日高のあとをうけて、5月31日に高等師範学校教授に就任します。日高はその3ヶ月足らず後の8月20日にわずか29才の若さで世を去ったのです。日高については、日向高鍋出身の日高と同郷の平田宗史福岡教育大学名誉教授による評伝があります。

さて、高等師範学校での谷本の担当は、教育学と哲学、教育学の内容は『高等師範学校要覧』によりますと、「普通教育学、特殊教育学、教授法、教育史、応用心理学、教育法令、実地練習」となっています。そのうち、教授法は町田則文や黒田定治などが担当していましたので、谷本は「普通教育学」をはじめ、教育史などの理論的な分野を担当したものと思われます。「普通教

育学」と「特殊教育学」というのは、高等師範学校教授時代の谷本が帝国大学文科大学特約生教育学科時代に師のハウスクネヒトを通して知ったヘルバルト派の殿将と呼ばれたヴィルヘルム・ラインの *allgemeine Pädagogik* と *besondere Pädagogik* との区別をそのまま踏襲したものです。もっとも後者は教科教育学と言うべきものなのですが、前者がヘルバルトの同名の著書を意識していたものかどうかはわかりません。『高等師範学校要覧』をみる限り、谷本の担当は、明治29年度まで「教育学、哲学」ないしは「哲学、教育学」のままで、明治30年度になって「哲学、教育学、教育史、論理学」となります。この年度から附属小学校主事の黒田が「教授法、応用心理学、教育学」を、この年度から新たにスタッフとなった波多野貞之助が「教育学」を担当しています。誰がどの学年の「教育学」を担当したのか、詳しいことはわかりません。ただ、谷本は、後で触れる『新体欧州教育史要』の「小序」で、高等師範学校での教育史の「開講実ニ五回ヲ累ネタリ」と言っています。その5回がどの学年でいつ行われたか、それとはっきりとしてはいません。谷本は、明治32年5月29日に「教育学ノ研究ノ為メ満三年間英独仏三箇年留学ヲ命」ぜられます。出発は9月27日、帰国は明治36年1月26日、その直前の1月1日「依願免本官」となっていますので、谷本の高等師範学校での教育は明治31年度をもって実質的に終了しているのです。明治33年度は、波多野貞之助が「教授法、実地授業、教育史」、それにこの年度より谷本の後輩でもある大瀬甚太郎が高等師範学校の教育学の教授陣に加わり、「教育学、教授法」を担当しますが、やがて大正期を通して大瀬が「教育史」、もちろん西洋の教育史ですが、それを主として担当するようになるのです。梅根先生などが大瀬の講義を聴いた最後の世代だということですので、これは相当に古い話なのです。

話を本筋に戻さなくてはなりませんが、『新体欧州教育史要』の発行は明治32年7月28日、ヨーロッパ留学を控えた多忙な時期に急いでまとめられたものと思われます。「小序」にも「今夏

不肖図ラズ海外留学ノ命ヲ拜」したことを記しています。そして、これは「講義手稿ニ多少ノ改竄ヲ加ヘタモノ」で、「講稿」として「筐底ニ蔵スルモノ」をベースにしたと言っており、高等師範学校の講義ノートをまとめたものといっ
てよいでしょう。その内容についても、谷本は、ヘルバルト派に連なるオットー・ヴィルマンの『陶冶論としての教授学』の第1部の歴史叙述に拠っていると正直に言っています。ヘルバルト派の主流の系譜を形成するラインやチラーには教育史の著作はありません。谷本はおそらくそこに教育史を物色したものと思われませんが、ないものはどうしようもありません。ヘルバルト派の主流になぜ教育史の叙述がないのか、それについてはひとつの仮説をもってはありますが、主題を逸れますので、今日のところは言及しません。

『新体欧州教育史要』の内容はきわめて単純で、「小序」と「目次」が漢字と片仮名、本文は漢字と平仮名で、総ページ数は197、第1章 希臘ノ教育、第2章 羅馬ノ教育、第3章 耶蘇教初期ノ教育、第4章 中世ニ於ケル教育、第5章 復興時代ニ於ケル教育、第6章 一洗時代ニ於ケル教育、第7章 現世紀ノ教育の7章立てとなっており、そのそれぞれが（一）内容、（二）特性、（三）学制の3小節で構成されています。復興時代がルネッサンス期を指すことは分かりますが、「一洗時代」とは何と啓蒙期のことです。ドイツ語の Aufklärung の直訳だと言っています。もちろん、谷本は、後の教育史書、たとえば大正4年に著した大部の『欧州教育の進化』では、一般的な用例に従って、「啓蒙時代」と記すようになります。しかし、谷本は、この「一洗」時代を的確にも「教育学」の時代と言い換えています。「一洗時代は称して哲学時代となせし如く、又教育学時代と称せらるべし」。その先駆的な指摘は、最近の山内規嗣君の学位論文が中心人物のカンペを主題に論証しています。ところで、『新体欧州教育史要』におけるペスタロッチへの言及はごくわずかで、「現世紀の教育」の「内容」のところで、「哲学を以て教育学を大成」させたと言われるヘルバルトの前座として、

「ペスタロッチ的思想の余波猶ほ存して、言語の教授に由りて論理の形式を練習せんとするが如きもの多し」と、ヘルバルト派主流のペスタロッチ評価をそのまま転用するに止まっています。

高等師範学校を去り、すでに明治30年に京都に新設された第二の帝国大学に文科大学が開学されるにあたり、その準備に関わったのち、明治39年のその開設とともに京都帝国大学文科大学教授となつてからは、心酔していた個人主義のヘルバルトを相対化するようになります。その契機となったのは、留学中のヨーロッパ、フランスは尾上雅信君の学位論文が扱った第三共和制期にあたりますが、そこで出会った帝国主義の優勝劣敗、弱肉強食の現実だったといわれています。有名な「沢柳事件」で大学を事実上追放された大正期以降、時折の講演のほかは、悠々自適の著述生活、フランス人ドモランの帝国主義新教育に、あるいは郷里高松への望郷の思いからか、弘法大師空海の著述に専念したりしています。谷本は79才と当時では比較的長命を保ち、その没年は戦後の昭和21年のこと、昨年が没後60年でした。

今回、谷本のことを調べていて、その人物像は多分に歪められていると思うようになりました。そして、そのおおきな要因のひとつが沢柳政太郎との対比にあると言つてよいと思います。新田義之東大名誉教授が最近著した沢柳政太郎の評伝でも、谷本はそのような扱いをうけています。沢柳を善人とするために、あえて谷本をそのキャラクターだけで悪役に仕立てているといった印象です。そこには、谷本が文科大学長になりたがっていたといった噂の類からの援用や沢柳が西田幾多郎昇任人事の推進者であったとの明らかな事実誤認もあります。そのような結果、私たちの沢柳への過大とも思える評価が谷本を貶めているとすれば、その名誉回復を図る必要も、はるか後輩のはしぐれの義務のひとつではないかとさえ思えるのです。大正2年の「沢柳事件」では、谷本の追放を図った沢柳が先の東北帝大での女子学生入学などの「功績」や後の成城での新しい教育で評価され、追放された谷本については「無能教授」だったのだから

らしかたがない、あるいは明治天皇のあとを追った学習院長乃木希典大将の行為を新聞で「無意味」だと論評するような「軽率」な人物だといった扱いがどうやら一般的なもののなのだからです。

今回、谷本の京都帝大追放のことを調べるため、すでに松尾尊允氏による滝川事件を扱った「京大事件」の研究にもその前史としての「沢柳事件」が取り上げられており、そこにも紹介がありますが、当時の文科大学の西洋史担当の少壮教授だった坂口昂博士の『鉄史斎日記』を博士のご令孫で、ご自身も西洋中世史、まえに述べた私の「清貧」についてのことなど噴飯ものになってしまうことをおそれるのですが、修道院の研究で著名な坂口昂吉慶應義塾大学名誉教授のお許しを得て、京都大学大学文書館で改めて閲覧、複写させていただきました。その迫真の記述で印象的なのは、まったく意外なことに、沢柳の傲慢さと対照的な谷本の進退の潔さです。この時点での谷本の振るまいの潔さを卑屈としかたれないとしたら、これは私たち大学人の品性が問われるようにさえ思われます。

さて、この第一級の資料によりますと、沢柳は、谷本が辞表を提出させられ、居合わせた坂口らに静かに別れを告げてからわずか4日後の7月16日、文科大学教授会に乗り込み、すでに自ら谷本の後任に推薦していた帝国大学哲学科時代の同級生で鹿児島の第七高等学校造士館の校長に就任したての小西重直と比較して、すでにおとなしく辞表を出していた谷本のことを追い打ちをかけるように「劣等中の劣等」、小西とは「雲泥の差」などと酷評し、退席を求めた坂口に対して「そんな水くさきことはいはぬものよ」と「混ぜかえした」というのです。沢柳は、その文科大学教授会に対して、留学したからといって、それだけでは教授にしない、教授昇任後1年で博士の学位授与を文部大臣に必ずしも推薦しない、いずれにしても実力本位の人事を行うと宣言しています。谷本に対する当てつけとも思われますが、第1の点は当時すでに完了していた西田幾多郎の倫理学担当の教授昇任にあたって文科大学教授会が『鉄史斎日記』にもあ

るように「早い機会に留学を」と付帯意見をつけていたことと重ね合わされて、留学してなくても西田のような優秀な者は早く教授にすべきだと沢柳が指導したと誤り伝えられるようになります。教授昇任後1年で学位授与推薦云々は谷本とはまったく関係ありません。谷本は、京都に赴くまえに東京帝国大学に、今日でも復刻で読める論文「中等教育の革新」を提出し、明治38年7月12日、すでに「文学博士」の学位を受けています。沢柳が文学博士会の推薦により文学博士の学位を受けたのは大正3年7月18日、京都帝大を去って、貴族院議員に勅選されていたときのことです。その文学博士会のメンバーには当然のことながら谷本も入っています。

京大名誉教授だった稲葉宏雄氏が谷本と小西の両者、それに沢柳を扱った研究を公刊していますが、そこでは沢柳の実際的な教育学が谷本の思弁的な教育学を許容できず、また大学教授の学問的な自律性の観点から、谷本がその担い手たるに相応しくないとして辞任を迫ったのだと論述されています。そうだとすると、沢柳は総長の行政的な権限によって自己の学問観の独善的な押しつけを図ったということになります。まさに、これは稀代の教育家沢柳にとって一生一代の失策、職務への自信と誇りにあふれていた総長沢柳の唯一の陥穽だったと言ってもよいかと思います。そして、これはあくまで推測の域を出ないのですが、沢柳のこうした態度には、帝国大学本科生の選科生や特約生への、そして帝国大学の師範学校への差別意識が強烈にあらわれていたといってもよいと思います。また、谷本の高等師範での前任者で夭折した日高が沢柳の帝大本科のクラスメートだったことも関係しているのかもしれませんが。金沢の第四高等学校中退の西田幾多郎が帝国大学選科生時代の本科生からの差別をバネに猛勉強したという逸話は、この推測と無縁ではありません。最後のほうで触れる篠原助市博士の回顧談の引用のうちに、このことをあらためて思い起こしてください。沢柳の判断のように、谷本が学者として本当に「劣等中の劣等」であるというのであればともかく、私は谷本と小西を比較して「雲泥の

差」があるなどとは思えません。高等師範学校や京大時代の谷本の教育学や教育史の講義はなかなかの評判だったようですし、それをもとにまとめた業績にもそれなりの重みがあります。そのひとつ、大正12年の『最新教育学大全』の「自序」のなかで、谷本は沢柳のことを「同志、沢柳政太郎博士」などと呼んでいますし、京都帝大での講義がベースになっている教育史書『欧州教育の進化』の「緒言」でも、京都帝大への招聘のいきさつは語っても、退職のことについては一言も触れてはいません。たとえそれについて語ったとしても、沢柳個人への恨みめいたことは残さなかったと思います。長生きの秘訣は、案外、むやみに他人のことを妬んだり、恨んだりしないことにあるのかも知れません。

雑言少々

ここ10年ほどの私の関心は、巨大科学の論理による学問再編のうねりのなかで、大学のなかでの教育学、つまり「学問としての教育学」をどう維持していくのかということにありました。そのことは教育学研究科長に就任してしばらく経ったところに、教育学の研究と教育においてわが国を代表してきた私たちの伝統にとって、これまで経験したことのない重大な試練が課されているように思われる、と当時の構成員の方々に少々大げさに訴えたことでもあります。学界や世間ではそれなりの評価を得てきた私たちの伝統がほかならぬこの大学のなかではどうもそれに見合うようなものとはなっていないということ、はっきりと言えば、その日常の言動から学問的な感性の共有が憚られるのか、確実に相手にされない状況がありました。「教育は重要」といった白々しく、そして聞き飽きたお世辞だけで、最近のCOEの選定など、肝腎なところでは明らかに疎外されてきました。

そのような状況の背景を考えるうちに、大学の学問としての教育学の存在論とでもいうべき発想が私たちには決定的に欠如していることに気づかされたのです。2年まえに創刊された教育学専攻の機関誌『教育学論集』の創刊号に若干の考察を載せてもらいましたが、教育史の研

究者として長く伝統ある大学に席をけがしてきた者として、つぎのような歴史の事実はどうしても気になってしかたがないのです。18世紀の末にカントが端緒をつけ、続いてヘルバルトやシュライエルマッヘルが構想した「学問としての教育学」のもつ批判的なみずみずしさは、すでに19世紀の産業化と管理社会化のなかで、国民教育の制度と方法の技術学として自らを限りなく疎外する教育科学のシステムに取って代わられてしまいました。教育学の運命をそのように見通したうえで、あえてそこにおいて学問としてのサヴァイヴァルを考えたのは、先に触れたヴィルヘルム・ラインなのですが、彼にとっては、国民教育の制度化を追い風に教育学が大学での講座を獲得すること、すなわちそれが学位取得可能な学問分野、つまり「大学の学問」となることだったのですが、それは技術などに学位授与に値する学問的な値打ちはあるのかなどと新カント派の講壇哲学から突き付けられた差別的な言辞に対する反論でもありました。しかしながら、一方では、パウルゼンやトレルチといった当時のドイツを代表する碩学たちは、明らかに、当時の大学での状況、ことに今日の文系と理系の学問分野を包含していた当時の哲学部における専門分化という状況を踏まえ、その統合の実際的な機能、つまりギムナジウムなどの教師の教育を展望したフマニタスの形成、言葉を換えれば人間形成の基本的な原理の理論的で歴史的な研究の必要性を大学の学問としての教育学に期待していたのです。

そして、そのような時代からすでに100年以上も経つのですが、彼らの教育学を「翻訳」したはずの日本の「学問としての教育学」の状況は変わっていないどころか、むしろ後退しているようにさえ思えてならないのです。さきの論文でトレルチのスタンスに思わず信仰告白してしまったのは、このような不安にかられたことだったのかも知れません。こうなると、今の私の立場上、どうしてもリアルな問題になってしまうのですが、志願者が慢性的に少ないこと、それに加えて学位授与率が他の学問分野と比べて格段に低いこと、ただそれだけの理由で、自

己評価、それに第三者評価の渦中にもある博士課程を置く大学では、学問の担い手の育成において成果があがっていない、つまり実質のない学問として、その存在理由を疑われかねない、明らかに冷やかで不本意な扱いを受けることにさえなっているのです。

それにしましても、現代日本の教育学が求められている研究の水準は、かつてのドイツのそれなどとは、もちろん比べものになりません。学問である以上、教育学にはすでに「処方箋教育学」Rezeptpädagogikなどと蔑称される「実践的、あまりにも実践的な」地帯を脱して、かつて自律した学問に要求された境位を、つまり学問的な営為をそのメタ技術の批判精神において維持しなくてはならなくなってきています。単なる技術など、学位授与分野として認めないという時代から、積極的に授与せよとの「外圧」がかかる時代への変化を、そのように居直って受けとめたいとさえ思うのです。教育学の研究と教育においてわが国を代表してきた私たちの果たすべき位置と役割も、ここにおいて、自ずと明らかだと思えます。教育学の「危機」と「正念場」とを、雑事に禁欲して、まさに一所懸命に、乗り切ってゆかなくてはならないのです。もちろん、学問が「学問」のなかに閉じ籠もって、いっさい「世間」から自らを隔絶すべきであるなどと言うつもりはありません。しかし、だからといって、講演で荒稼ぎなどといわれた谷本の学識にとうてい及びもしないのに、作りだされたジャーナリズムに易々と乗って安っぽい教育談義に現（うつ）を抜かしたり、あるいは規範的なご託を並べ立て、それを社会貢献などと嘯（うそぶ）いたりする必要もないのです。最近、教育学を名乗る某学会の雑誌の特集号を見せられて、その内容に愕然としました。その学会の会員ではないので打ち捨てておけばよいのですが、いくら実際的教育学を標榜する沢柳でさえも、存命であれば、自らの想像を遙かに超えた悪しきアリズムに汚染された同人評論誌同然の惨状にきつとおなじような感想をもつことでしょう。ホモジーニアスなギヴ・アンド・テイクが横行する相互批判の欠如

した学会など、いくら勿体をつけたところで、滅びるのはそう遠くないことと思います。どこの国でも、大学の学問研究を抜きに学会が存在するなどということは考えられません。現に、教育学において明治以来の確固とした伝統をもつ本学に長いあいだ籍をおいてきたからこそ、才に欠け徳に薄い私のような半端者でも学界においてもそれなりの位置と役割が与えられてきたのです。決して、その逆ではありません。こう考えてくると、今日の大学では、移ろいやすい「世間」を安易に追いかけるのではなく、むしろ大学が大学たりうる所以、すなわちそれに対する確実な歴史意識と批判精神とを維持することこそが学問が学問であるための基盤としてますます必要となっていてくると、今の私は考えています。

ここで、すこしばかり、観点を変えたアフォリスティックな話題をとりあげてみることにします。博士の学位はいままでこそ研究者の門出の切符のようなものとなっていますが、かつての学位、ことに文科系のそれは、以前「夏目漱石の学位辞退事件」の小論でも言及しましたが、自分の学問を完成させた碩学の象徴でありました。私たちの学統の祖である篠原助市博士は、東京高等師範学校から東北帝国大学法文学部教授に着任してまもなくの昭和のはじめ、学位論文の執筆を開始することになりますが、そのいきさつをつぎのように記しています。

当時東京の書店から出版の申し込みが多く、殊に教育研究会は前からの縁故もあり、執筆中であった「理論的教育学」をと迫られた。私は容易に承知しなかった。前にも言った通り、なるべく閑寂な生活に入り、経済的にもあまり配慮しないようにありたい。それには「学位」を得ておくのが良からう、学位なくとも世間は適当に評価してくれるなどとうぬばれてはならぬ。かように考えて、四月のある日、散歩の途上から引き返し、すぐその夜から、学位論文の筆をとった。そしてもし学位論文が通過するようであったら、その時「理論的教育学」も一所にしてと、教育研

究会に申し入れた。異議のありようはなく、両者をほとんど同時に世に送ることにきめ、私は毎日学位論文の稿をつづけ、一応まとまったのは、忘れもせぬ十月末、もう仙台には雪がちらつき、夜中の蕎麦売の笛が待たれる頃であった。論文の題は「教育の本質と教育学」。それ迄教育学の学位請求論文の多くは教育史（本邦又は西洋の）であったから、一つ、変わったところをとの野心も幾分加わっていたのである。（『教育生活五十年』昭和31年刊）。

この記述は、当時の帝国大学では師範出身という「傍系」のゆえに、教授どうしの交友が制限されざるをえなかったことに歯ざしりをしたあとにつづくだけに、博士の負けず嫌いの真骨頂があらわれています。私はこの文章を読んで以来、「鶏口となるも牛後となるなかれ」、流行に乗った妙な学界ポピュリスト、あるいはその提灯持ちと呼ばれることにだけはなまゐりと心に期して、意識的にトレンドイーとなることを避けてきました。

ところで、これを篠原博士個人の問題としてではなく、碩学と評価される見込みなどおおよそありえない私たち普通の研究者によって担われるしかない教育学一般の居直りとの苦衷に満ちた解釈を、泉下の篠原博士は果たして許されないものでしょうか。「出版の申し込み」を通俗レベルでの自己満足と読み替えるかどうかはともかくとしても、「傍系」とか「交友の制限」といったことは、このさい、帝大対師範といったかつての対抗図式を超えて、今や巨大科学に囲まれた教育学の現状そのものと、また「閑寂な生活」や「変わったところをとの野心」という個人的な動機などは教育学研究にたずさわるものが他の学問分野からその存在を脅かされることのない学問としての自律性への動機と、私はきわめて単純に読み替えたいのです。

おわりに

とうとうあと半月ほどを残すだけになりました。これまでずっと他人事のように思ってきたことが現実化し、心残りが無いはずはなく、本

来ならば寂しさでいっぱいといった状況なのでしょうが、主査として懸案だった3名の方々の学位審査もここ2年で完了し、またそれぞれの出版の目鼻も立ち、またすでに1年まえから実質的に後任となる優れた研究指導担当の教授にも恵まれて、とりあえずふたりの大学院生の後事を託すこともでき、おかげさまでほとんど後顧に憂いのない状況ですし、しかも3年ほどまえから関わっている大学評価・学位授与機構の大学評価の法定業務でこのところ寧日のないありさまで、残念ながら、まったくそのような殊勝な心境にはありません。しかしながら、泉下の梅根先生や外国教育史研究室ゆかりの諸先生、そしてことに前任者の松島 鈞先生に果たしてお赦しいただけるような20年だったのかどうかということになりますと、それだけはまったく自信がありません。

大学評価のしごとは、私のような札付きの凶状持ちには、もとより毒を飲まなければやれるようなものではなく、しらばっくれて無責任に善意の人を気取るだけではとうてい対応できないことは重々わかっていたつもりでした。それでも、これと筑波とのカルチュア・ギャップはあまりにも大きく、当初は東京の竹橋や小平のオフィスに通うだけでも心身ともにつらく、またそのいらいらが筑波の同僚や学生の皆さんの不興をかったのではないかと、今になって反省もしています。しかしながら、本業の教育学や教育史の研究でさしたる業績があげられなかったのにもかかわらず、長く基幹の大学にいたからでしょう、「お前の番だと」言われた以上、あと何年できるかわかりませんが、長年お世話になった教育系の大学や学部、それに短期大学のためにももうひと踏ん張り、実際の評価作業に本格的に関わってみて、ようやく自分に言い聞かせることができるようにもなりました。

このような事情もあって、教育史の断片的な著述活動以外には、まともな研究のための時間の確保が難しく、また煩わしい状況にもなっていましたので、2年まえにはいくつかの学会の役員や会員は辞めておりました。そして、この4月からは、すでに唯一会員となっている教育

史学会の片隅にでもおいてもらって、すでに出版社からは見放されかかっている小著の完成を急ぎ、さらにもはや趣味としかいいようのなくなった研究に何か価値を見いだしていただけるものでもできれば、3年まえにその創刊を強く勧め、今年も含めて毎年駄文を続けて掲載してもらっている大学院教育学専攻の『教育学論集』には、これからも投稿させてもらいたいと、あらかじめ投稿規程の拡大解釈をお願いしたりもしています。

今年は例年にない暖かさで老骨にはおおいに助かりますが、かえって何か変なことでも起きるのではないかと案じもしています。杞憂に終わればよいのですが、いずれにしても油断は大敵、お互いにくれぐれも自重自愛、頑張ってゆきましょう。ご静聴を感謝します。どうも、ありがとうございました。

(付記)

この文章の素となっているのは、事実の明らかな誤認や誤解、それに欠落や不備などに限って事後に補正を施した最終講義（平成19年3月13日、於ペスタロッチ祭）の朗読用原稿である。また、実際の講義では本文に関連する80枚ほどの図像をプロジェクタを通してバック・グラウンド・ピクチャとして提示したが、ここでは掲載誌の性格上これを割愛せざるをえなかった。